



# 長野県連婦だより

## 未来を志向して

会長 中條 智子



高い山は冠雪をいただき里も紅葉に染まり、秋の深まりを感じるこの頃です。

婦人会の皆様には日頃より婦人会の活動に対し熱心に取り組みいただき、心より感謝申し上げます。

さて、今年はウイミンセミナーで健康（特に食事）について研修を致しました。健康はみんなが願うことですが、生活習慣病については、毎日の生活の中で一人ひとりが予防の自覚を高め、実践していかなければと思います。長野県においても「信州ACE（エース）プロジェクト」として、健康づくり県民運動を展開しています。

また、8月9日には「2015年世界をひとつに平和のつどい」を戦後70年の思いをこめて開催しました。菅谷松本市長さんの講演では「産業、経済」を優先するのか、「命」を優先するのか等、平和について考えるよい一日でした。

婦人会として未来を志向し、男女共同参画社会づくりのため伝統ある組織を大切に、一人ひとりが社会の中で主役であることを意識して時代と地域のニーズに答え、次世代の発展のために皆様のご尽力をよろしくお願いいたします。

## 長野県県民文化部表彰受賞

長野県連合婦人会は平成27年6月8日、「消費生活活動分野において尽力し、顕著な功績を上げた」として長野県県民文化部表彰を受賞しました。

### 内 容

- 平和な未来を願う「世界をひとつに平和のつどい」事業
- 現代の問題点をテーマにした「くらしのフォーラム」で、男女共同参画、地球環境、少子高齢化社会、青少年健全育成問題等の学習を女性の立場で継続
- 平成24年に一般社団法人になり、地域で必要とされる婦人会として多くの消費者とともに新しい事業を实践



ひと ゆめ みどりエッパ  
信濃から 未来へつなぐ 森づくり

第67回 全国植樹祭 ながの 2016

「苗木のホームステイ」に取り組んでいただいている皆さん。ご協力ありがとうございます。水やりを欠かさず、夏場の強い日差しから守り、この冬の寒さを乗り越え元気に育つよう、これからもよろしくお願い致します。平成28年6月5日、長野市Mウェーブで「全国植樹祭」式典が開催されることとなりました。皆さんの身近な場所でも多くの方が参加できるように、県民植樹や緑化イベントが予定されています。こちらへの参加もよろしくお願いいたします。



ウイミンセミナーながの '2015

講師 教育・食育アドバイザー 大塚 貢 氏

演題 「キレイな子供を育てよう — 毎日の食事から — 」

平成27年5月26日 於 メルパルク長野



～ 平成4年荒れる中学 ～ 非行・いじめ・不登校・学習にも無気力状態

生徒数1200人の長野県内の中学校の校長として赴任。外で群れてタバコを吸う。弱者をいじめてお金を巻き上げる。いじめや不登校が多い。こんな学校の改革に取り組みました。

～ 生徒を教室に戻す ～

『授業の改革』

「解る」「出来る」「楽しい」授業を目指し先生が切磋琢磨。熱心な教師が増えて、生徒のやる気が出てきた。教室を抜け出す生徒が少なくなった。

～ 学校に潤いを ～

『花壇作り』

花壇作りをスタート。大人に頼るのではなく、生徒自身が泥にまみれ、汗にまみれ、堆肥や土を作り、種を蒔いて育てた花が咲く。花の美しさを感じて達成感を味わう。「全国花壇コンクール」で毎年のように文部大臣賞や大臣賞相当を受賞。花壇作り2年目頃に、非行もほとんどゼロに、不登校が40～50人いたのに2人に減った。

学校で食（給食）をこんな風に改善しました

菓子パン・揚げパン・中華麺・ソフト麺・スパゲッティが主食、米飯は週に一度程度から……



週5食米飯に切り替えました

家庭でも学校給食でも副食は肉が主流から・・・魚・野菜タップリに切り替えました



地域に協力を得て無農薬・低農薬で育てたお米・大豆・果物を提供してもらいこんなメニューができました

日	主食	おかず	架
5	ご飯	さんまの甘露煮、ごぼうサラダ、豚汁、杏仁豆腐	943
6	菜飯	タラのマヨネーズ焼、ビーンズサラダ、なめこ汁、果物	794

いじめやキレル子はどこに問題があるのか、毎日の生活を調査することで浮き彫りになったのは食の問題でした。

昼はコンビニ弁当、カップ麺、菓子パン、清涼飲料という子は問題を抱える子が多く、キレイやすく学習にも無気力な状態でした。

また家庭での食の調査をしてみると菓子パン、ハム、ウインナー、ジュース、レ

トルトカレーなど添加物の多い食生活が見えてきました。せめて3食のうち給食だけでもと改善にとりくんだ内容が「ご飯を主食、魚と野菜たっぷり」のレシピでした。青い魚はDHA・EPA が豊富で血管を柔らかくし血液をきれいにしてくれるので脳への酸素や栄養の供給がスムーズになります。毎日手のひらいっぱいの子魚を食べることで咀嚼力を高め脳の活性化を図ることも取り入れました。結果はアレルギーの子が少なくなったこと、非行がなくなり心が落ち着いて学ぶ意欲も高まりました。教師の努力とあいまって学力も著しく向上したのです。「授業の改革」「花壇作り」「給食の改善」で生徒たちは大きく変わっていきました。



平成27年4月26日  
噴煙を上げる御嶽山を背景に

平成27年度 長野県連婦研修旅行

2014年9月27日、御嶽山が噴火。58人が死亡5人が行方不明という大惨事になりました。御嶽山の火山活動は低下してきていますが今回の噴火の影響で木曾周辺の観光客が激減。そんな木曾の皆さんを元気付けようと企画した「木曾路一奈良井宿一日本大正村一」を巡る研修旅行に、県下会員さんが参加して下さいました。宿のくるみさわ旅館では夕食時に噴火の際の様子を旅館のご主人が詳しくお話して下さいました。土産には少しでも木曾復興の励みになるようにと赤カブの漬物を予約注文。郷土料理「ひだみ」では、どんぐりのコーヒーやどんぐり餡のまんじゅうをみんなで食べました。



2015年 世界をひとつに 平和のつどい  
演題 今こそ「平和の連鎖」の努力を！

講師 松本市長 菅谷 昭 氏 平成27年8月9日  
於 長野県男女共同参画センター「あいとびあ」

今年は戦後・被爆70年という大きな節目の年です。今、日本・世界の平和に関し危惧しなければいけないことがヒタヒタと押し寄せていて、国民一人ひとり自らのこととして国のあり方、各自の考え方をしっかりしておかないといけない時がきていると感じています。

— 原子力災害「チェルノブイリ、福島原発事故から学ぶこと」 —

1986年旧ソ連のチェルノブイリ原発で事故が起きました。私は1996年から5年半ベラルーシ共和国で、原発事故により健康被害に苦しむ子どもの医療支援をしてきました。福島原発事故をきっかけに、3年前(事故から26年目)現地状況を見に行きました。除染をしたにも拘わらず土壌汚染が改善せず、原発から30km地域は居住禁止区域でした。原発から90km離れたモーズリ市(軽度汚染地域)に住む子どもたち(事故後10年たってからこの地に生まれた子どもたち<15歳未満>)の健康状態ですが、免疫機能低下(風邪・気管支炎に罹ってもなかなか治らない)・疲れやすい(学校の授業も短縮して行っている)・造血器障害(貧血等)が出てきているということでした。また、周産期異常(未熟児・早産・死産・先天異常<ベラルーシ共和国では妊娠期間中の検査をして異常が見つかった場合、半強制的に妊娠中絶をする状況です>)が増えてきて困っているということでした。

子どもや妊産婦は大人の3~4倍放射線の影響を受けやすいので、私は「汚染地に住まない、汚染された物を口にしない」という、この教訓を国に進言するのですが、なかなか動いてくれません。

福島県には、子どもを県外に移住させたいと希望する人がいることを聞いて、国がやらないなら私がやろう。受け入れる学校や住む場所を考え、そこに福島の関係者にNPOを立ち上げて頂き、子どもたちが住む寮の運営をすることとし、子どもたちを松本市に受け入れました。この松本留学を一つのモデルケースとして全国に広げたいという思いで、なんとか成功させたいと務めてきました。学校も生徒たちも温かく迎え入れてくれ、四賀地区のみなさんも大切に面倒を見てくれています。親元を離れて暮らす子どもたちは、悩むことも多いと思います。この先も進学、仕事、結婚、出産等で精神的に悩む場面もあるのではないかと心配しています。でも今は、放射能の影響を避ける生活をしてもらいたいという一心でやっています。

— 松本市の平和行政への取組み —

- ・世界の恒久平和は人類共通の願いです。昭和61年松本市は、平和を愛するすべての人々とともに、核兵器の廃絶と戦争のない明るい住みよい明日の郷土を願い「松本市平和都市宣言」をしました。
- ・昭和63年「非核宣言自治体協議会」に加入。平成20年「平和首長会議」に加盟し、第1回会議では、松本市の平和への取組み事例を発表しました。平成23年には20万人規模の地方都市としては、初となる国連軍縮会議(核に対する専門家の集まり)を開催しました。私は医療者の立場から「原子力安全と医師の視点」と題し、地球規模で原子力エネルギー政策の方向性を見直す必要性を訴えました。「『産業・経済』を優先するのか、『命』を優先するのか、今まさに岐路にたたされており『命』を大切にするような方向性を、我々は勇気をもって、そして足を踏みとどめて考え直す時がきている』」との考えを述べました。平成26年、被爆地以外の都市としては初めて、松本市で「平和首長会議国内加盟都市会議」を開催しました。「松本からの平和のメッセージ」を沢山の著名人からいただきました。その中で高校生が平和学習の発表を行いました。『集団的自衛権の閣議決定したことはおかしい。実際に戦地へ行くのは僕たちだ。本当にこれでいいのか』と、堂々と自分たちの主張を述べました。
- ・広島平和記念式典参加事業では中学生代表に記念式典の参加・記念資料館の見学・被爆体験者の講話を聴いてもらいます。広島で学んだことをレポートにまとめた「ひろしまレポート」を各学校へ配布しています。
- ・松本市平和祈念式典は毎年8月15日、沢山の市民が集い平和を願う式典を行なっています。
- ・小中学生平和ポスター展では子どもたちに平和に対する素直な気持ちを込めてポスターを書いてもらうことで、平和への意識を高めてもらえるようにしています。
- ・戦争遺跡記念碑建立事業では戦争の爪あとを後世に残し語り継いでいくため、戦争にまつわる記念碑を市内4箇所に4年がかりで建立しました。
- ・松本市の平和の取組みを学ぶ場として、中央図書館や文書館に平和資料コーナーを設置しています。
- ・戦争体験者の証言を集め記録に残すため戦争体験集を作成する取組みを進めています。



市長就任後、世界平和の希求と核兵器廃絶は自らの政治信条の根幹をなすものとして、積極的に取り組んできました。これからも若者たちへ、「戦争の悲惨さ」「命の大切さ」「核兵器の非人道性」を訴え続けていきたいと思っています。人間にとって大切なこと。それは、一つ目は健康で人生を全うすること。二つ目はその中にささやかな幸せがあって生きられること。最後に大事なものは、平和であることだと思います。平和のつどいのスローガン「平和な地球を子どもたちに渡そう」にあるように、平和のバトンを渡すのは大人の責務です。みなさんがこの活動を発展させ全国に広がっていくことを願っています。

2015年 世界をひとつに 平和のつどい

# 平和について思うこと

## 諏訪郡連合婦人会会員：小池千澄さん

私には20歳前後の孫が6人います。自分の孫が戦闘地に行き命を落とすかもしれないと考えたら、そんなことは絶対イヤです。作詞家なかにし礼の「若者よ戦場に行くな」を引用し、「平和こそが故郷であり、生活であり、存在理由だ。臆病者、卑怯者と言われようが泣きながらも抵抗し戦場に行かないでほしい、人殺しをしないでほしい」と語られ、皆が力を出し合い安心して暮らせる未来が築けるよう活動を続けていきたいと思います」と結ばれました。

## 伊那市連合婦人会会長：山崎恭子さん

戦後70年となった今日、集団的自衛権閣議決定となり、憲法を安全保障法案に合わせるべきだ等、目と耳を凝らしていなければ、知らないうちに、知らされないうちに間違った方向に向かっていきます。このままもし戦争にまきこまれたら、私達の子どもや孫が戦地へ出ていくことになります。戦争を風化させないためにも、苦しくつらい時代に生きた方々の体験を聞き、語り継いでいくことが私達にできる務めだと語られました。

## 信州大学教育学部3年：松井舜莞さん

平成14年の『学生平和の意識調査結果』を示しながら、質問「あなたは原爆投下を許せないか」で、はいの回答—49%、消極的賛成が半数以上いることになる。これは戦争が風化してきているということではないか。学校では平和学習に積極的に取り組んでほしい。戦争関連の場所を訪れる。被爆体験者の話を聞く。戦争のアニメ・テレビを見るなど。戦争について学ぶことは平和への意識を高め戦争の風化を防ぐことに繋がる。戦争の悲惨さを知れば、世界で起きている紛争に取り組むきっかけ作りになるはずだ。私もこの活動を続けていきたいと話されました。

## 信州大学教育学部3年：宇都宮脩さん

僕は20歳。若者として“平和について思うこと”を話してほしいと言われ、一緒に暮らす祖父母の戦争体験を初めて聞いた。77歳になる祖母は、東京生まれの東京育ちとばかり思っていたが、中学生のとき中国の天津市に行き昭和19年の春、家族皆で最後の船で命からがら帰って来て親戚を頼って長野に疎開したという。聞くことすべてが衝撃だった。79歳の祖父は長野市に親子3人で暮らしていて、父親に昭和19年の秋令状が届き戦地に行った。空襲に遭ったこともあり、女手一つで生きるのは大変と稲荷山へ母親と疎開。終戦の日、ラジオの音が嬉しかった。父が帰って来る！しかし帰ってきたのは紙切れ一枚だった、と涙を流して話してくれた。文献でもない、映画でもない、70年前のことでも直接聞く言葉の空気感、温度感から戦争体験者の祖父母の言葉は重く響いた。新聞に投稿された大学院生の一文 ～日本は愛せない国になっていく～ を紹介『私たちは、平成の時代に生まれた。・・・途中省略・・・大学院の今、自分の国が70年前の教訓と民主主義に別れを告げようとしている。私たちは「捨て駒」としてこの世に生まれたのか。少子高齢化の今、私たちは増え続ける高齢者と傾き続ける経済を「ゆとり世代は駄目だ」といわれながら支えなければならない。若者たちの生活は保障されていないのに、たくさん子どもを産み育てろ、という。権力者は、庶民の生活も、戦場の実情も知らないのではないか。そのような人達に支配された国を、なぜ私たちは愛さなければならないのか。そもそも何から日本を守るのか。日本は何に狙われているのか。狙われているのなら権力者は武力ではなく外交で国民を守るべきであろう。愛することもはばかれるこの国を守るために、命を差し出せというのだろうか。』

僕たちは自らなりたくてゆとり世代を選択したのではない。政府は具体的な将来像も描けぬままゆとり教育という改革を奨めたが学力が低下した今、政策転換をしている。僕たちはゆとり教育の被害者だ。この問題一つとっても自己肯定感を感じられない若者が増えている。被害者は私達だけではない。昔の戦争体験者についても同じだ。当時、日本国の繁栄と言う名の下に侵略を続け他国の民を虐げる。そのことで結局何がしたかったのか。本当に国民が求めていたのは、ただ幸せな生活。なのに祖父母のような戦争の被害者が生まれてしまった。70年たった今、同じようなことが繰り返されようとしている。憲法9条改正議論の中に「平和」「平穩」という言葉が欠けている。そのひずみが大きなひずみになって、私達のゆとり教育のように、祖父母の戦争のように、取り返しのつかないことにならないか。日本という国家が「若者が、国民が、愛せる国、平和な国」であり続けるように、これからも自分のできる活動をしていかななくてはと思っている。